

岡田慎一郎・上村忠正・永井絢也・長谷川真人・村上京子・守澤幸晃 著
理学療法 臨床実習サポートブック—レポート作成に役立つ素材データ付
前野竜太郎（常葉大学准教授・理学療法学）

「自分たちが学生の時に欲しかった内容をこの一冊に詰めました」という言葉が、この書籍の帯に記されている。この本のコンセプトはまさにここにある。臨床実習という、学生にとっての最難関科目において、生きるか死ぬかの苦労をされた先輩の経験や思いが詰まった、現役の学生さんや社会人学生さん向けの待望の一冊と言える。

この本は、実習生なら必ず1週間前に行わないといけない臨床実習指導者への連絡や、実習に向けての必要物品の確認から始まり、バイザーおよびスタッフとのコミュニケーションの取り方、デイリーノートの書き方、わからない臨床上の疑問への対応、そしてレポートの作成方法、発表レジメの作成方法、最後に実習終了後のお礼状の書き方まで、学生が施設で実習を始めようとするとき、「どうしよう、わからない!」と不安になることへ、できる限り応えようとしている労作である。

ただし、ここまで懇切丁寧に書かれた一冊をもってしても、臨床実習は甘くはないのが現実である。その原因は、病院・施設ごとに評価治療の基準の細部に独自性があり、その異なる基準の中に、外部から実習生として入り、短い時間で適応していかないといけないからである。よって、臨床実習を進める上で一番問題になるのは、多くの場合、実習生と、バイザーを中心とした医療スタッフとのコミュニケーションである。これは、バイザーがいか感じているか、そしてそれを実習生の側が感じとることができるか、という、なかなか説明が難しい感性の問題でもある。その辺りの感性の世界の一端も、この本では、漫画も含めてわかりやすく紹介されている。

臨床実習の本質は、医療の世界、ひいては理学療法の世界に入るために必ず身につけないといけない儀式・儀礼をいかに理解し、適応し、加えて行動に移すか、にある。独特な医療文化をくぐり抜けることなしに、一足飛びに医療人、そして理学療法士になるのは不可能である。もし学生さんたちが、医療系の「社会人」というものがどんなものか知りたいのであれば、この医療の世界独特の通過儀礼を知ることが必須である。

社会人学生を含め学生にとって大切なのは、それまで学んできたこと、自らのこだわりや自我といったものを、いったんカッコにくくって脇に置き、指導者に従ってみることである。それが実習をうまく運ぶ一番の近道なのかもしれない。臨床実習は、終わってみれば、ほんの通過点にすぎない。これで人生が全て決まるわけではないし、生死が決まるわけでもない。もしさまたまなよしなしごとで、理不尽を感じ、疑問に思ったことがあったとしても、バイザーに合わせて頭の中で上手に整理し、対応できればそれが一番であろう。まずは、常に何かを学ぼうとする意欲と、日々の誠実な対応を忘れないよう心がけよう。そうして苦闘する日々の中で、思わぬところでこの労作が支えてくれるかもしれない。この本をひもといたとき、何かがひらめいてくるかもしれない、そんな一冊である。

最後に、臨床実習指導者の皆さま、この書籍をぜひ参照いただき、日々誠実に学ぼうとしている実習生を、時には優しい大きな背中で見守ってあげてください。皆さんの学生時代を思い出しつつ、

(B5 頁224 2015年 定価：本体3,000円＋税
[ISBN978-4-260-02413-6] 医学書院刊)